

組み込み型保険の潮流 (3)

エンベデッドインシュアランスに関わるプレーヤーは、①顧客接点を持つサービス事業者②保険商品を提供する保険会社③両者をつなぐ「イネーブラー」(実現支援者)のインシュアテック(保険テック)企業——に大別できる。関わり方は4パターンある。

最も多いのが、事業会社のサービスフローの中に、保険会社が提供する保険商品を、イネーブラーが介在して組み込むパターンだ。システムをつなぐAPIなど技術的ソリューションを提供するイネーブラーが果たす役割は大きい。

2つめは、保険会社がイネーブラーを介在させずに独自に取り組むパターンである。ただ、大手保険会社による実験的な取り組みの域を出ていない印象が強く、既に販売を停止している例もある。

3つめは、イネーブラーが保険会社を兼ねるパターンだ。インシュアテック企業が自ら保険商品を開発し、顧客接点となるフロントサービスの開発から保険の組み込みまで一貫してサポートする形である。日本では少額・短期の契約のみ引き受け可能な「ミニ保険会社」が多い。

欧米でよく見られるのが、MGA(Managing General Agent)だ。MGAとは保険会社からアンダーライティング(引き受け)権限を付与され、引き受け条件の提示から契約の管理、事故対応までする特殊な代理店である。技術的ソリューションのみ提供するケースもあれば、自身が開発した保険商品をシステムとともに相手先の

ブランドとして展開できるホワイトレーベルで保険会社に提供するケースもある。

4つめは、サービス事業者がすべての役割をほぼ自己完結に近い形で主導するパターンである。ライセンスとリスク保有に関わる部分を保険会社に委託するパートナーシップ型と、ライセンスを取得して全てを自社で対応する事業拡大型がある。決済サービス「アリペイ(支付宝)」を提供する中国のアントグループはパートナーシップ型、電気自動車(EV)世界大手の米テスラは事業拡大型に該当する。サービス事業者主導型は実現のハードルが高く、先進テクノロジー企業に限られている。

最近では、サービス事業者と保険会社をつなぐオペレーティングシステムの重要性が再認識されている。ここでいうオペレーティングシステムとは、サービス事業者と保険会社をつなぐ主要な制御ポイントとなるシステムを指し、モジュラー(規格)化した保険をサービス事業者のデジタルプラットフォーム用に調整して供給する役割を担う。

しかし、巨大なレガシーシステム(旧式システム)を抱える大手保険会社は、迅速で柔軟に自社開発するのが難しく、技術水準も高くない場合が多い。

そのため世界では、保険とIT(情報技術)を組み合わせるインシュアテック企業が、エンベデッドインシュアランスをけん引している。インシュアテック企業への期待は高く、関連スタートアップはベンチャーキャピタルから多額の資金を集めたり、保険会社が買収に動いたりしている。

保険テック企業がけん引

エンベデッド・インシュアランスの構造

